

# 小学生の発達段階と関わり方について

## 発達とは？

- ・ 誕生から死までの人の心身の変化を「発達」という。  
発達には「量的変化」「質的变化」の2つに分けられる
- ・ 量的変化：身長・体重、語彙数など
- ・ 質的变化：運動機能、知能、思考など

発達は遺伝それとも環境？

⇒現在は遺伝と環境の両方を組み合わせた「相互規定的作用モデル」が主流となっている

## 発達段階とは？

成人に至るまでの思考・知能、運動などの「成長過程をまとめたもの」  
または「発達の課題」

ピアジエ (Piaget, 1948) の認知発達理論

- ① 感覚運動的段階(0~2歳頃)
- ② 前操作的思考段階(2~7,8歳頃)  
前概念的思考の段階(2~4歳) **直感的思考の段階(4~7,8歳)**
- ③ **具体的操作段階(7,8~12歳頃)**
- ④ 形式的操作段階(11,12歳~)

## 発達段階とは？

### ハヴィガーストの発達理論(学童期)

- ・ 遊びを通じて必要な身体技能を学習
- ・ 成長する生活たいとしての自己に対する健全な態度の形成
- ・ 遊び仲間と付き合うことの学習・正しい男女の性役割の学習
- ・ 読み、書き、計算の基礎的技能の発達、日常生活に必要な概念の発達
- ・ 親と自己を区別し、独立した個人となる、社会集団や制度に関する態度の発達

## 小学生の発達段階

**具体的操作段階(6~12歳) : 具体的な物事に対して論理的に考えられるようになる(ただし、実際に見たり動かしたりできる物事に限る)**  
自分の視点とは**異なる視点**から物事を考えられるようになる

- ・ 人間関係が**親子から友達中心**に変化し、他者との協調性が増えていく時期  
親への「甘えたい気持ち」は継続するが、行動(例：何して遊ぶなど)は友達と一緒にっていく
- ・ 心身ともに成長する中で**物事の考え方が大きく変化する時期**であり、成長するなかで「怒りっぽくなる」「気分が落ち込みやすくなる」など不安定になりやすい

## 小学 1～3 年生の発達段階

- ・ **直観的思考の段階(3,4～7,8歳)**：自己中心性が発揮される時期  
相手の視点に立って考えるには、難しい段階  
7～8歳ぐらいは終盤で知的発達とともに落ち着いてくる
- ・ 1年生はこれまでの生活様式が変わり、集団生活に馴染めないなど「小1プロブレム」が起きることがある
- ・ **社会性の発達**：「善悪は他者に決められている(先生がだめと言ってた)」という考えに加えて、「行動の結果」で**判断**してしまう

例：学校の廊下で鬼ごっこ

ルールとしては「悪いこと」のはずが、「みんなも鬼ごっこしていた」や「楽しかった」などによって「善いこと」と考えてしまう

## 小学1～3年生の発達段階

- ・ 行動や考えには幼さが残っているものの、本人は「わかる・できる」と自信があるため、指示やアドバイスに対して反発しやすい

かかわり方：

- ① 「～したらダメ」「～しない」など否定的な注意ではなく、「～したら?」「～しよう」などの肯定的な言葉で関わる
- ② ケンカなどはその場で注意せず、まず考えてもらう  
⇒ 「自己中心的な考え」になった際に「～君はこう思ったかも?」や「自分だったらどう思う?」など「他者の気持ち」を考えてもらう
- ③ むやみに「子ども扱い」せずに「半分大人」と思って接する  
⇒ 子どもに任せられることは任せてみる

## 9歳の壁(おまけ)

- ・ **9歳**になると勉強面において、算数では「掛け算、割り算、分数、小数点」理科では「電気、磁力」といった**具体的にイメージするのが難しい**内容に入っていく
  - ⇒まだ、**論理的な思考**になっておらず、抽象的な物を考えるには不十分な時期である
- ・ 学習内容の変化によって、**学力の個人差が大きくなり**、期待される学力を**下回る子ども**が急激に増加するため、「**9歳の壁**」とも言われる
  - ⇒自信を無くしてしまい、不登校などの問題が増える  
自分たちとは違う他人を受け入れられず、いじめにつながりやすい

## 小学校高学年の発達段階

- ・ 思春期に近づいており、身体は成長するが心は子どもの状態など心身の成長に差が生じ、不安定になりやすい
- ・ 人間関係も友達が中心の関係性に変化する

**ギャングエイジ**：小学校高学年頃に現れる集団での仲間関係  
同じ行動による一体感が重視され、同じ遊びを一緒にする仲間、  
遊びを共有できない場合、仲間になれないといった関係になる。

- ・ 親離れの時期でもあり、大人が禁止する遊びなどを行い、  
そこでの一体感を楽しむ

## 小学校高学年の発達段階

- ・「グループが違くと遊ばなくなる」「グループの意思と違うため外される」「グループに入り損ねる」など、集団からの孤立によるトラブルが目立ってくる  
小学6年生頃から「うつ病」や「ひきこもり」になってしまうことも・・・

大人への理想が崩れ始め(現実の受入準備)、大人の言動の矛盾に対して不満が生じやすい

かかわり方：

- ①必要以上にかかわろうとせず、向こうからくるのを待つ
- ②本人の言い分を聞いてから大人の意見を伝える  
「～しなさい」などの指示語は拒否されるので  
「～した方がいいと思う」などアドバイス程度に留めておく

## かかわり方について

- ① 禁止用語を使わず、**肯定的な言葉**を伝える  
例：「廊下を走りません」⇒「廊下は歩きます」
- ② 言葉がけは**具体的な内容で短く簡潔**に伝える
- ③ 片付けや移動など場面が変わるときは前もってアナウンスし、見通しを持たせ、変更への**気持ちの準備**をしてもらう  
例：「あと5分で片付けます」
- ④ 「静かに過ごす時間」だけでなく「動き回る時間」を用意する

## かかわり方について

- ⑤ 話をするときには話す前にこちらに注意を向けてもらう
- ⑥ 何らかの役割を持たせる(自己効力感を高める)
- ⑦ 試し行動(いたずらなど不適切な行動の前後、何度も大人を見てくる)には乗っからない(注意など)。ただし、無視して終わりではなく、良かった行動を必ずほめる。
- ⑧ 制作などは無理強いせず、興味を持ってもらうまで待つ  
⇒職員が1人でやっている近づいてくることが多い

## 職員が気をつけること

- ・ 情報を共有するとき、①「事実を時系列で報告」、②「報告者自身の見立て(出来事の原因など推測の情報)」の順に報告する
- ・ 対応で困ったときは、他の職員にも相談し、一緒に対応を考える  
⇒ただし、何でも相談ではなく、1人でも考えるまたは対応してみる
- ・ 活動中は「監視」ではなく「見守り」の姿勢で行う  
遊びに加わることで、子どもを詳しく知ることができる
- ・ 見守りは「今、関わっている子ども」だけでなく、子どもと関わりつつ部屋全体の様子を見る事。座る位置などにも工夫が必要

## 職員が気をつけること

- ・ 短所より長所を注意深く見るようにする  
⇒長所を伸ばすほうが、子ども・大人双方にとってメリットが多い
- ・トラブルが起き、状況がわからない時はまず、話を聞いてみる  
「何があったん？」など責めない言葉がけになると話が聞きやすい
- ・気になる様子や出来事は必ず職員全員に共有する
- ・同じ注意は1～2回程度に抑えておく  
(それ以上だと注意自体に反発してしまう)
- ・感情的にならないようにする。「怒る」ではなく「諭す」  
感情的になることは相手のペースに振り回されている証拠  
⇒感情的になっていることを自覚し、対応が難しい時は応援を呼ぶ